

第47回

日本の書展

審査所感

【漢字作品】中村伸夫 (なかむら のぶお)

日展特別会員 読売書法会常任理事 全国書美術振興会理事 「日本の書展」現代書壇代表作家

書という芸術には永い歴史と伝統があります。今に生きる私たちの時代の書も、その堅固な土台の上に成り立っています。この土台を崩すことなく、しっかり引き継いで、新しい時代のための今の一步を大切にしなければなりません。

そのためにも実験的な新たな試みが必要です。過去の人たちも新たな表現を志向し、その流行や継承、あるいは消滅の繰り返しによって、数千年の書の歴史が作られてきました。王羲之の書でさえ、彼以前にはなかった新たな試みの偉大な成果です。

しかし、天才王羲之ですら、すぐれた既成の表現を模倣することからはじまったはずで、すでに存在した見事な文字の表現を、技術として分析的に学ぶことを通して、新たな創造の道が開かれたのです。模倣こそ創造の母といわれます。過去の名跡でも師匠の書でも、とにかく自分が心酔する書をしっかりと模倣し温習して、筆力を鍛え、技術を磨くことが何より大切です。

今回は741点の漢字作品の応募があり、厳正な審査によって344点が選ばれました。臨書の対象は同じでも、表現の手法は様々でした。文字の構造を厳密に再現し、筆力充実した佳作も多く、また、歴史上の名家の臨書例のように、臨書それ自体に自己の表現を積極的に託したような作品もありました。

【かな作品】高木厚人 (たかぎ あつひと)

日展特別会員 読売書法会常任理事 全国書美術振興会理事 「日本の書展」現代書壇代表作家

日本の書展「公募臨書」部門も本年で8回目となる。仮名作品の応募数も毎年200点を上回る程度で安定し、本年は211点であった。その中から入選108点を選んだ。50%入選、つまり半分落ちるといふ実に厳しい関門である。今回は土橋靖子先生と審査に臨んだ。

どういう態度で審査に臨んだかを述べてみたい。作品としてそれぞれの古典の持つ特徴、味わいをきちっとすくい、古典の鮮やかな姿が浮かんでいるものを取りあげた。仮名では臨書という原寸でそっくり書くことが基本となるが、その中でテキストの持つ特長、素晴らしさを再現しなければならない。そっくり書くということは形そっくり、墨の扱いそっくり、線そっくり等々、すべてそっくりを目指さねばならないのである。

今回取り上げられた古典としては関戸本古今集と香紙切が目立ったが、高野切一、二、三種、中務集、一條撰政集、本阿弥切、寸松庵色紙、継色紙、升色紙、針切、筋切等々、平安時代の主たる古筆が出てきたのはうれしかった。

審査で気になった事は、墨量の多い作品が多く見受けられたこと。墨量が多いと重くなり、墨の潤濁による奥行き表現ができない。また、線の切れが鈍くなり、爽やかさ、清澄さが再現できないのである。拡大臨書に挑戦した人も墨の扱いには特に留意して欲しい。拡大して書く時こそ形だけでなく、何を再現しようか見極めて筆を持つことが大切である。

臨書が最も大切な学習法であることは間違いない。今後も大いに学びチャレンジして欲しい。

【篆刻作品】和中簡堂 (わなか かんどう)

日展会員 読売書法会常任理事 全国書美術振興会監事 「日本の書展」現代書壇代表作家

昨年の審査では印影のみの、落款のない無款の作品を多く見かけたが、本年は殆どどの作品に款記が見られ好感を持った。表現の方法に差はあるものの、各々の印箋内の充実に目を見張った。是非とも継続して取り組んでいただきたい。

摹刻する大きさが、第一に原印と同じ大きさを心掛けるべきだろう。原印を2倍、3倍の大きさにして摹刻をしていた人もいたが、原印の良さを見失ってはいないだろうか。やはり古典として長い間、様々な人々を魅了してきた名印には風格があり、説得力があろう。斬新で創作の源泉となるものばかりである。古典は新しいのである。